

「北信濃“飯山”の街にみる“人・ことば・昔話”」

佐 藤 厚

はじめに

北信濃「飯山」は言うまでもなく雪深く、一年のうちの約半年は雪景色である。しかも飯山市の北端「照岡・西大滝地域」は南端「蓮（ハチス）地域」に比べ、わずかに30kmしか離れていないのに真冬の積雪量は四倍以上多くなる。さらに新潟との県境、富倉地域や栄村に至ってはそれ以上の年も珍しくない。先人たちは俗に「一里一尺」と言って「北に一里行くと一尺多くなる」と、その積雪量の差を伝えてきた。

平成24年の1月～2月もまた記録的な豪雪に見舞われた。ゲリラ豪雨ならぬゲリラ豪雪だ。地球温暖化の影響でもあるという皮肉なまでの大寒波の襲来。一晚の積雪量が1mを超える日が数日あった。これは想像を絶する。時間と共に危機感が増し、放置してはいられない。家の倒壊に値するからだ。市内でも未明より除雪、やや降雪が小康状態になった時を見計らって雪下ろしに追われる。若い男衆がいる家ならともかく、男女問わず中高年にとってこの作業は、冬期の運動不足解消をはるかに超える運動量である。それでも人々は仕事に出かけ、商店は開店し日々の生活を営んでいる。そして、厳しい冬も月日とともに過ぎ去り白一色だった日々がまるで嘘のように春は野山も里も花に彩られる。今年は豪雪の影響と季節外れの寒波で春の訪れが遅かったため、咲く時を待ちわびた桜も菜の花も他の花々も、ほぼ同時期に一齐に咲き誇った。今までにない美しい風景を目にすることができ、様々な香りが入り混じった春の空気を感じることもできたが、ゆっくりと春を愛でる余裕すらなく、まるで早送り画像のような光景であった。こうしてまた、厳しい冬の年明けから飯山の時は刻まれていく。

飯山の冬の厳しさから春の訪れを語るには聊か言葉足らずであるがお許し頂き、今回は、関西や首都圏を転々と渡ってきた自分の経験をもとに、飯山市町内商店や飲食

店における人々の独特の気質（方言に見る心情やサービス、ホスピタリティの局面）について、実際の体験から生まれ育てられた飯山の地ではあるが郷土を愛するが故にやや辛口なコメントで紐解いてみたい。

また、本年3月に他界された岡田千春氏が生前、再話・編集された「奥信濃の昔ばなし（1～5巻）」の中から、今回は第2巻より共通語と方言が織り交ざった作品を（2012年現在、主に交わされている）奥信濃、飯山地域の方言をもとに書き記したい。

1. 商店・飲食店での会話より

T：店主 S：筆者

飯山市内のメインストリートと呼ばれる商店街は、ここ数年来シャッターが閉まったままの店が増加している。そんな状況下ではあるが、今日もどうにか商売を続けている数少ない商店の一つにお邪魔した時の内容である。会話は方言での表記を主にする。難解部分は共通語に表記しなおすが、その他は会話より想像、理解して頂きたい。また、会話内容は筆者が店主との実際に交わされた会話をもとにポイントを絞って記述した。会話からその場の状況や雰囲気などが伝われば幸いである。

<文房具店にて>

・ボールペンを購入するために訪問。店主とは面識はあるが、馴染みではない。店内には高校生が3～4人。

S：こんにちは

T：えらっしい。なんにするい？（何を購入しますか？）

S：ボールペン、見せてほしいんだっけんども…。

T：そっち側にあらさな（ありますよ）。

—しばらく、選んでいると…

T：どんなん、いいや（どんなものがほしいですか）？

S：四色とシャーペンが一緒になってるやつなんだけん…

T：あ～それな…そこにあるやつだけださな。

S：わかりやした。（一種類しかなかったので購入を決めかね、他のボールペンも手に取って見ていると）

T：四色だねかったんかや（四色ボールペンではなかったのですか）。

S：あ、いや、こっちのも見たかったんで…。

T：……。 （無言で、しばらくこちらの様子をうかがっている。）

S：じゃ、これお願いします。（赤と青のボールペンを一本ずつ持ってレジへ。）

T：それで、いいんかや？（やや無然としている。）

S：あ、はい。

T：いいのねくて、わりかったね（お気に入りがなくて悪かったね）。

S：い、いいえ、大丈夫です…。 （支払いを済ませ、店を後にする。）

T：ありがとー。（私を見てはいない。）

店主とは短い会話であった。店を出て歩きながら思う。なぜ客であるこちらが店に気を使うような雰囲気になっていたのだろうか。四色ボールペンとシャーペンが一体になっているものは、一種類しかなかったのであって、他のものと比較ができないのでは購買意欲もなくなるというものだ。しかし、その時二色はどうしても必要だったので購入したまでである。確かに、年々人口が減る一方で（2012年6月現在 22,875人）郊外に大型ショッピングセンターができ、日中の商店街は閑散とし、人通りもまばらな状態では品揃えも豊富にできない個人商店ならではの事情も理解できないわけではないし、一種類しかないのならばそれも仕方ない。しかし、嘘でも愛想よく「今、そこに出ているだけなんだけど、他には〇〇や〇〇なんかもありますよ。明日には入ってくるよ。申し訳ないね。」ぐらいは言ってもよかったのではないか。（こちらの勝手な想像を許して頂けるのなら）私は何も購入しなかったわけではない。店にとって客のニーズに沿えなかったことを不甲斐ないと思い、それを無然とした表情で「仕方なく買って行ったんだろう」などと思われたのではたまらない。店主の表情や棘のある言葉に高校生たちも私の後に続いてそそくさと店を出て来たのは言うまでもない。

個人商店には大型ショッピングセンターにはない良さもある。現に、中高生にとって郊外の大店に行くには徒歩ではもちろん自転車でも遠い。ましてや今年のような冬となればなおのこと、街中の地の利を考えれば当然近くの商店に足を運ぶことにもなろう。しかし、残念ながら店側の状況は先のとおりである。ショッピングセンターができる前、この文房具店も繁盛していた。他の店舗とも共同でサービス券を発行し

商店街の賑いに一役買っていた。少し多めに（1,500円以上か…）購入した客にはボールペンかミニメモ帳の「おまけ」がサービスされた時もある。中高生の文房具選びにも高価なものを書き付けるのではなく、「おまえだったら（あなたたちなら）こっちのシャーペンのほうが書きやすいやさ。ちょっと試してみ。」と言って実際に書かせてみて、安くても使いやすさ、中高生のお小遣いにあったものを勧めていた。幼児や小学生には、わずかな購入でも流行のシールのおまけがあって、「（兄弟には）ふたんで（二人で）喧嘩しねで仲良く分けっこするんだで。」なんて言いながら店主は子どもたちの頭を撫でていた。サービスとホスピタリティがごく日常的に成立していた。かつて他の個人商店にもその姿は当たり前のようにあった。古き良き時代を懐かしむわけではない。ショッピングセンターは効率の良い物流と物品の豊富さで経済的効果を生み出し、人々の生活に便利さと潤いを与えている。シャーペン一つとってもショッピングセンターのほうがやや安い。しかし、個人商店のような人々の会話や交流は少ないように思う。人口の少ない地域だからこそ成立していた人々の日常生活における交流の温かさ、そして家族の中のみならず、街中の商店で交わされる方言でのやり取りもまた地域文化を支える大切な要素ではなかろうか。

<居酒屋にて>

・学生時代から帰郷する度に訪れていた馴染みの店。ここ7～8年行っていなかった。

この冬久しぶりに、幼馴染の友人たちとこの店で落ち合うこととなった。約束時間に行ったが、私が一番乗りとなり他のメンバーは所謂「飯山時間」である。

S：こんちわ～お世話さんですう。

T：えらっしゃい！おっ?! えらい（とても）久しぶりじゃねえかや。どしたの？

S：今日さ、中学のもん（者）達と久しぶりにいっぺやろさ（一杯やろうじゃないか）ってことになってさ。

T：そうかえ。

S：だけん（だけど）、ちっと（少し）早く来ちゃったかや。

T：だ～あ～、そんなことねえさあ。あいら人待すの、うんめからなあ。

（いいえ、そんなことはないですよ。あいつらは、人を待たせるの上手だからね。

：常連客に対する皮肉)

いっぺやって待ってたって、いいくんなもんださ (良いくらいですよ)。ビールでいいかや?

—先ずはカウンターに座る。すかさず、飲み物とお通しが出てくる。先に入店していた若者たち3人 (こちら常連) に対して。

T：おめた (あなたたち) そこちょっと、空けてくれや。後からいっぺ (沢山) 来るんださ。わりなえ (悪いですね)。

それにしちゃ、えらい久しぶりだねかい。元気だったかや。

S：ええ、おかげさんで。大将 (店主の通称) も元気だったかえ?

T：まあまあださ。腰ゃいてく (痛く) なるし、客もめっためったすくねく (どんどん少なく) なるし、えわったもんださ (困ったものですよ)。

—奥に行った若者たちの一人、K。

K：腰はしょうねやさ (仕方ないですよ) 大将、歳、歳。

T：うっせえぞ。よけいなこん、せってんじゃねえぞ。(うるさいよ。余計なこと言うんじゃないよ)

K：しんべえしてんださ。(心配しているんだよ。) ひとんで (一人で)、雪下ししてさ、無理しんな (しないでと) せってるのに…。

T：そのっくんなこと、まだまだできらさ。(そのくらいの事は、まだまだできますよ。)

K：そうせって、屋根からおったってしょう (落ちたって人)、今年ゃえっぺいるんだってで (沢山いるそうですよ。) おれった (俺たち) てつだあさ。(手伝うよ。)

T：そうかえ。んじゃ、お言葉に甘えて明後日の日曜日ってどんなだえ (どうですか)? —と言って、焼酎のボトルを彼らのテーブルまで持って行く。恐らく雪下ろし手当。

T：まあ、それ手付だ。力つけてってくんなして。(力をつけていって下さいよ。)
残りは終わった後ださ。

K：(その仲間も) おおし、えっぺ力つけるか。(大笑い)

T：調子こいてらさ。(調子づいているなあ。) ところで、おめの (あなたの) 母ちゃは元気かや?

S：まあ、どうにか…。

T：はやく、けえってきてさ（帰って来て）、面倒見るってもんじゃねえかい。

—ご近所だけに、余計なお世話である。が、一応頷く。

S：この冬はよく降るね。

T：降るなんてもんじゃねやさ。（降るなんてもものじゃない。：強調する時）

こないだ（このあいだ）、降ろしたばっかだせうのに、もう1メートル以上あんだで（あるんだよ）。

—ビール一杯目が終る頃、頼んでもいないのに二品（漬物と和え物）が出てくる。

「それじゃあ、もう一杯…」となったところへ、友人たちが登場。後は雪が解けるほどの賑わい。

たわいもない居酒屋のワンシーンにすぎないが、雪深く人も少ない飯山の地で何十年も店を続けるには並大抵なことではなかったと思う。入店から帰り際まで、大将のさりげない心遣いが客たちの心をつかんでいる。たまに若者たちが羽目を外しかかると、「出禁にするぞ!」と凄む。ただでさえ客が少なく、言えた立場ではないのだが…。そこがまた魅力となっている。若者からご近所のお爺さんまで、老若男女が集まる。大将がお爺さんに「こっち、ここあったけから（暖かいから）」と言えば自然と若者たちは席を譲る。飲み過ぎそうになったカップルに「明日は寒じるってでえ（冷え込むさだよ）。風邪ひかねようしてくんな。」と言えば、10分後ぐらいには帰り支度となる。大将の独特な表現ではある。寺町飯山は昔から京都とのつながりは深い。少なからず「ぶぶ漬けでも…」「一見さんお断り」の文化の影響はあるに違いない。年々過疎化の傾向が強い街の中に、それが良い影響として人々の心をつないでいるのが大将である。先の文房具店の店主も実のところその良い影響はあったはず。長年厳しい自然環境の中で生活していると、人々は物に対しても人に対しても大切にする気持ちが無意識に働き、直接的な言葉ではなく婉曲的な言い回しとなっているのだろう。だからであろうか。方言の語尾が「～ださ、ねやさ、だで」などの強い言い方になっているのはその裏返しなのかも知れない。

平成26年度終わりには、北陸新幹線が開通し飯山駅も開業予定である。

「一見さん」も沢山訪れる。現在の飯山の状況から少しでも快方に向かって欲しいも

のである。それには常連客が増えるサービスとホスピタリティを大将から学び、その時に備えることだ。無論、外野から言いたい放題では「おめこそ、何やってんだやら（あなたこそ、何をやっているのか）。」と言われかねない。そこで、方言での表現活動などで微力ながら文化継承の地域貢献ができることを実行していきたい。

以下の昔話もその一つである。

奥信濃の昔話（二）第10話「話千両」

昔、ある人が江戸へ冬働きの（に）え（行）って、そうしていよいよ四月の雪消え頃になったから、この金持って家へけえって（帰って）、おっかあば（女房を）喜ばそうと思って、大事な金ば（を）持って歩いてえ（い）た。

道中であまりに人かがたかっている。何だろうそ（と）思ったら、ある男が、「おれの話ば（を）聞いてえけ。一口千両てんだけども、千両ねえ人は、まけてやってもいい」と、こうせ（言）っている。みんなにきかせん（ない）で、一人一人に話ば聞かせるとせうので、じゃあ俺も聞かせてもらあずか（おうか）と思ったけど、錢よ（を）勘定したらどうもちょっと足んねえ。そうっと男に、

「そんないい話、おん（おれ）にも聞かしてくんねかえ。おれ千両なんかねんだがどうだ」せったら、「おめ（お前）が、まじめに働いてきた金だったら、千両ねくても、おせえ（教え）てやるぞ」って。そして、

「そいじゃ、おめ、よく聞いてえけよ。『大木（おおぎ）より小木（こぎ）』忘れんなや。『大木（おおぎ）より小木（こぎ）』、それから今一つ、ついでにおめにおせえてやる。『短気起こらば、心静かに』この二口を、よく忘れねよにおぼえていけ」

何だ、こんな話でまあ、冬じゅう稼いだの、あとちっとしか残らねで、みんなあの人にやっちまって、おれまあ何たらこと（何ということ）をした。こんな話聞いたきりじゃあ、家え（行）っておんなしょ（女衆）に叱られるんじゃねえかつそ、なんて思いながら歩いてえ（い）ると、大きな雲がもくもくと出て来て、夕立が始まったっつお。こらまあえらい（ひどい）。雷は鳴るし雨は降るし、どっか（どこか）雨宿りしんじゃえげね（しなきゃいけない）。なんともって（なんて思って）少し急いだら、そのえと（うち）にもこう（向こう）の方に大きな木があった。あの木だら（な

ら）雨宿りにもいやさな（いいだろう）と思って、その木の下にえって（行って）やれやれと思っていたら、雷様だんだん近づいて来て、今にも落ちそ（そう）になった。そん（の）時に、はてな『大木（おおぎ）より小木（こぎ）』って聞いたが、これはまあ大木の下になんかえらんねど（いられないぞ）。このわきの方の小さい木の下へいかず（行こう）と思ってその小さい木の下へ飛びこむ、そのせつな、「バリバリーッ」とその大きな木は雷にあって、真っ二つに裂けちゃった。さあ、おれあ命拾った（命拾いをした）。これあまああの人（の）のせう（言う）こと聞いといていかった（よかった）。

そんなことをせえながら（言いながら）、ぼつぼつ歩いてきたけんども（来たけれど）、家（に）着くの遅くなって、夜中近くになっちゃった。家（に）着いて、遅くなってまあ、おっかあ寝てるかやそもって（寝てるかなと思って）「コンコン、コンコン」とやったが、さっぱ起きてこね（さっぱり起きて来ない）。何ほどくたびんたんだやら（どれほど疲れたのだろう）、よく寝ってるなあ（眠っているなあ）。それにしても確かに心張り棒かって（して）あるから、中にいるはずだが、なして（どうして）起きて来ねえんだらず（起きて来ないのだろう）。

そうと窓の隙間から中は暗いんだっけん（暗いのだけれども）よく目をすまして見たところ、どうもほっかぶり（頬張り）した男と寝てらさ（いる）。こりゃあふざけて。このおれ（この俺は）骨折って冬働いてきたのに、間男でもしてるんかや（しているのか）と、よっぽど格子踏んぼしょって（踏み折って）飛びこんで、はたっ殺さず（叩き殺してやろう）と思ったけん（れ）ども、そんな時に『短気起らば、心静かに』どうもあの話や、こん時っこさ（あの話がこんな時に思い出された）。一つこれどういふんだやら（どういうことだろう）、まあまあ待てと思って、

「トントん、トントん。おれだ。」

「どちらさんだえ（どなたですか）？」

「おらだよ。」

「はあ、おとつあんかえ。」

って、大急ぎで戸（かど）を開けてくんた（くれた）。へえって（入って）今にも、はたっ殺すくれ（叩き殺すくらい）のいきおいで、布団の所へ行（い）って見たところあ、男（おとこ）なんかえねで（いなくて）ほっかむりした物がある。

「これなんだえ（何だ）。」

ってたら（と言ったら）

「おめさん（お前さん）の留守に、変なおとこしょ（男衆）にでもかまわれちゃあえげね（いけない）から、おらこうやって、しいじょ（始終）男と一緒に寝てるようにしてたんだで。」

それ聞いて、

「やあ、えかった（良かった）。おれまあ、実はおれもなあ、おめば（お前を）怒るどこじゃねえ（どころじゃない）けど、銭あちいっとん（銭は少しに）なって、みんな話千両ってせう人（ひと）に取られちまった。まあ取られたんじゃねくて（なくて）おれがやったんだけど、物好きしたもんだなあ。だけれどもおえ（そうだけれどもなあ）おれ来る道（みち）ばたで『大木（おおぎ）より小木（こぎ）』てって（と思ったので）雷（かみなり）さんで今（いま）少し（もう少し）で死ぬ（しぬ）ところ、命助（いのすけ）かって来た（きた）んだ。こっち来て、おめも間男（まお）してた（した）もって（もって）いっこく（短気）起こして、はたっ殺（ころ）せば、それこそおれ、後悔（こうかい）するんだ（するところだった）。ああえかった。」

ったら（と言うと）

「おとつあ、おめも命拾（いのちひろ）った（と）んだから、銭（ぜに）なんかどうでもいやさ（いいよ）。」

せって、おっかあも喜んでくれた（喜んできた）ちゃ（ということ）です。

そういう話（はなし）ださ（話（はなし）です）よ。

【参考文献】

- ・奥信濃の昔ばなし（1～5巻）岡田千春：再話・編集 飯山振興公社：発行
- ・方言よもやま話—信州方言とそのおもしろさ—

「文化の諸相」上田女子総合文化学科

- ・下水内（みづのう）の方言 青木千代吉：著 長野県飯水教育会：発行

【協力】

- ・飯山市本町商店街、鉄砲町商店街